

ずいそう

若気の至り

熊谷 一男



オイラも54歳になった。振り返ってみると、もっといろんなことができたなあ。と、後戻りしたくなるが多々ある。孔子は、「五十にして天命を知る」と言っているが、オイラも五十四にして、なんとか人並みにわきまえることができるようになった気がする。20代、30代、40代の頃は相手のことなどあまり考えず、時にはやんちゃをして困らせてきたことが多々あった。今思えば恥ずかしくて人には話せない若気の至りであるが、今だから話せるオイラの若気の至りの一部を晒させていただきます。

あれは三十代後半だったと思うが、娘の誕生日にケーキを買い、ケーキが崩れないように慎重に車を走らせていた。ある交差点が近づきスピードを緩めて徐行し、歩行者や車両の有無と安全を確認し、ピタッと車を停止させずにそのまま通過した。この交差点は一時停止違反者を摘発するパトカーが頻繁に見張っている場所であることは承知していた。ところが、なんとパトカーがどこかの陰に隠れて見ていたようで、赤色灯を回し追ってきた。パトカーの拡声器から「前の車停まってください」の指示に、車を左に寄せ停止させた。(この時すでにオイラの脳みそは沸騰し始めていた)以下、オイラと警官のやりとりである。

警官A：こんばんは、〇〇署です。運転手さんこの道初めてですか？

オイラ：毎日のように走ってますから、よく知ってますよ。一時停止場所も心得ている。

警官A：確かにブレーキ踏んでスピードダウンしてましたが、あそこは一時停止場所なんですよ。

オイラ：だから、徐行して歩行者や車両がないのを確認して通ったよ。見てたなら分かるだろう。歩行者も車もまったく居なかったことが。

警官A：あそこは自転車もよく通るし、危険な場所なんですよ。

オイラ：よく知ってるよ。だから安全を確認してから通ったと言っているだろう。何聞いてんだよ！

(警官もオイラの口調や態度に対して、熱くなってきたようだ。いいぞ、とことんやろうじゃないか。と内心燃えてきた。)

警官A：あそこは徐行するのではなくてピタッと停止しないと駄目なんだ！

(あれこれもめていると、もう一人の警官(上官)が降りて来て)

警官B：いやあー。運転手さん、歩行者いなくてよかったねえ。

オイラ：何いってんだよ。オイラが歩行者を無視して乱暴な運転しているような言い方して、冗談じゃねえぞ！さっきから言っているように、人も車も居ないことを確認してから通ったんだよ！

警官B：たまたま居なかっただけで、常に人にやさしい運転を心掛けてください。

オイラ：そもそもあの場所が危険で監視しているのなら、暗闇に隠れてコソドロのような真似せずに、赤色灯回して監視している方がよっぽど安全だ。市民やドライバーに安全を呼びかける警察としての本来の姿だろう。パトカーを暗闇に隠して事故が発生するの待ってるのか。そもそも目的が交通安全じゃないってことだよ。きれいごと言うなよ。

警官B：こうやって取り締まることで、事故への芽を摘んでいるんです。

オイラ：だからかえって危険だって言ってるんだよ。カッカきてこの後冷静に走れないよ。危険な運転をしていた訳じゃないんだから今回は見逃せ。

警官B：それやったら俺たちクビになるもの。

オイラ：そんなことでクビになる訳ねえだろう。今度からピタッと停めるから今回は見なかったことにしろよ。

警官B：それはできません。とにかく、後ろのパトカーに乗ってください。

オイラ：なんで俺がパトカーに乗んなきゃいけないんだよ。

(その後も同じ話を繰り返し20分。娘がケーキを待っていることを思い出したオイラは、違反切符にサインした。)

警官B：では、これから人にやさしい運転をお願いします。

オイラ：おまわりさんも仕事だからな。分かるよ。でもよ、もっと取り締まらなくちゃいけない人間を取り締められよ。

と、捨て台詞はいてその場を走り去った。その後は、腹の虫が収まらずイラついてたが、家に着いて娘の笑顔を見た瞬間にそのイラつきは吹っ飛んでしまったのはいうまでもない。今考えてみると、警察官への対応は大人気なかったと反省している。今だったら素直に大人の対応をするだろう？ たぶん…。